

## 「牧畜」に関する研究の歩み

帯広畜産大学 平田昌弘

『沙漠研究』誌の20年間に投稿された牧畜関係の原稿は、原著論文が15稿（全論文数の約8%）、展望論文5稿（同約14%）、資料報告・短報6稿（同約18%）、シンポジウム・分科会報告4稿（同約4%）、特集記事5稿（同約6%）となっている。牧畜は、沙漠という乾燥した厳しい環境を人びとが生き抜くための有力な生存戦略であり、極めて重要な生業である。それにも拘らず、シンポジウムや特集で牧畜が取り上げられることが少なかったのは、いささか残念なことである。しかし、以下に示す通り、『沙漠研究』誌に投稿された牧畜に関する論文は、牧畜を多方向から分析するものであり、牧畜という生業への総合的理解を志してきたものである。

『沙漠研究』誌の設立当初、牧畜・農耕を人類史上の生業発展として位置づけ、歴史的時軸で論考する論文が何編か報告された。赤澤の「狩猟から農耕へ、西アジアにおける歴史」6(2)、平田らの「シリアにおけるアラブ系牧畜民の放牧形態の歴史的変遷」9(4)、藤井の「乾燥地考古学の諸問題 1. 遊牧民の考古学的可視性」10(4)などである。赤澤は、西アジアにおける農耕・牧畜の誕生は、豊かな余裕のある社会において誕生したことを指摘した上で、農耕の成立過程を説明する。農耕の誕生により人口扶養力が増大したが、逆に人間と土地との執着を切り離せないものとなり、この閉鎖的関係性こそが自然破壊を招いた根源であると指摘する。藤井は、遊牧の考古学的研究についての問題点を考察している。遊牧は遺跡や遺物を残し難いことから、農耕に比べて考古学的研究はより難しいが、より精密な遺跡分布により分析が可能であるとし、遊牧の歴史的再現構築の方向性を指し示す。平田は、アラブ系牧畜民の飼料資源利用と土地利用パターンの事例から、牧野（野生植物）と農耕地（大麦穀実と刈跡残渣）における両飼料資源の年間を通した利用は西アジアの家畜管理にとって不可欠なシステムであると述べる。遊牧民自身が農耕を開始し、半定着農牧民化して移動性が減じたものの、この飼料資源利用／土地利用の形態はイスラム帝国時代から現代まで変りないことを指摘し、地中海性気候の条件下における飼料資源利用／土地利用の地域特性論について論考している。いずれの論文の視点も、牧畜・農耕と自然環境の関係性を見つめた生業論に着目し、牧畜・農耕の発達過程の再現構築に焦点が置かれている。

『沙漠研究』誌の20年間を通して牧畜に関して興味があつた注がれた点は、「牧畜と環境問題」という現代的課題であった。地域的にはウイグルから外・内モンゴルの中央アジアから北アジアに集中し、牧畜と農業が有機的に結合

するウイグルと内モンゴルでは定住牧畜民と農業とをいかに両立させるか、外モンゴルでは牧畜の移動性が、これからの牧畜のあり方と環境保全の焦点となる。外モンゴルでは、川田らが「モンゴル国 Kherlen Bayan-Ulaan における過放牧環境下の植物群落の種構成と地上部現存量の変動」17(1)で、過放牧環境下のモンゴル草原ではイネ科からキク科ヨモギ属が優占する植生へと変遷することを報告している。平田らは「モンゴル国ドンドゴビ県における宿営地の季節移動システム」15(3)、「モンゴル中央部における宿営地の季節移動システム—モンゴル牧畜民の定住化はあり得るのか?—」17(2)で、西アジア型遊牧の定住化過程との比較を通じて、農耕資源と直結しないモンゴルにおいては遊牧民の定住化は生態学的に無理があることを論考し、モンゴル草原の持続的利用は移動性にこそあると指摘する。ウイグルにおいては、康馬爾丁が「新疆ウイグル自治区における持続的農業発展の可能性」13(2)で、中央政府主導で急激な成長を遂げた新疆の地において、これからの持続的社会に向けてこそ牧畜と果樹栽培を活用した開発が必要であると啓蒙する。劉・吉野は「中国新疆タクラマカン沙漠のオアシスにおける経済発展と土地荒廃」7(1)で、水資源を供給するオアシスに農・林・牧畜・漁業と人びとの居住環境が集中していることを指摘し、人口増加に伴った農耕地の安易な宅地化や家畜飼養のための荒地の不適当な開墾に対して厳しい警笛を鳴らす。平田らは「中国新疆ウイグル自治区における定住化政策と牧畜形態の変遷」17(3)の中で、定住化した牧畜民の所得は家畜の個体売却と生乳売却に主に依存していることを明らかにし、換金作物としての農作物生産を抑制し、自らが所有する家畜を飼養するための飼料作物生産に転換していくことが重要であり、自然草地での放牧圧を軽減するためにも農作物収穫跡地の残渣を積極的に放牧利用してゆくことが重要であることを指摘する。一方、内モンゴルにおいてもウイグルと同様な調査研究が報告され、周は「中国内蒙古自治区における牧畜業の変遷」5(1)で、経済体制改革や人口増加などにより遊牧から定住に移行した経緯を分析することを通し、過放牧により草地在劣化し、市場経済をも考慮した新たな家畜飼養システムの改善が急務であることを指摘する。天谷は「学生と取り組む内モンゴルの沙漠化対策に関する研究活動」18(2)と題して、長きにわたる牧畜と環境問題に関する研究を報告している。その成果の一つとして、道格通らによる「内蒙古オルドス市ウーシ旗における牧畜経営の実態分析と放牧地の持続的な利用と管理への検討」17(2)では、草原生態の実態と牧民世

帯レベルでの経営状況を分析し、牧民が安定した持続的な草地利用および牧畜経営を行っていくには輪換放牧と飼料栽培にかかっていると指摘する。楊によって企画された「内モンゴルからのメッセージ」11(1)では、中国内モンゴル自治区出身でももとは牧民であった4名の研究者を配し、モンゴルの人びとの自然観や世界観、内モンゴルの草地の現状、草地の持続的利用の可能性などについて総合的に報告している。遊牧から半農半牧化していく過去150年間を事例研究し、内モンゴルでの環境破壊は中央政府主導により誘導された急激な人口増加と農業開発にこそ原因があることを鋭く描いている。急激に変化する社会体制と悪化する草地生態系に対して危機感を強く抱くモンゴル研究者達の熱い思いを瑞々しく伝え、その場で生業をおこなうモンゴル牧畜民のための未来像を提起している。この特集記事でも、定住農業化が進んだ現代の内モンゴル牧畜においては、飼料作物の生産や輪牧などが有効であることを指摘する。環境問題解決に向けたより積極的な研究は、川鍋らや遠山らによって精力的に研究・実践されてきた。川鍋らは「中国東北西部および内蒙古東部草原の沙漠化の現状と回復対策」8(2)で、過放牧や草地開墾などによる草地退化のプロセスを報告し、植生退化の早期診断とその対策としての緑化修復に焦点を当てている。川鍋らは牧柵による草地保護、優良種の草本植物や灌木の播種、耐塩植物の播種による蓄積塩類の除去、防砂林帯の設置、遠山は植林（「モンゴル大草原の沙漠化の現状と対策」9(1)）により、退化した草地の改善策を具体的に実践している。

「牧畜と環境問題」以外のテーマとしては、文化人類学、もしくは、食文化に関連する報告がおこなわれてきた。池谷は「商品経済化にともなうソマリのラクダ遊牧と紛争」3(2)で、民族間で勃発する紛争を、宿营地移動、植生、民族領土、集団の離合集散、生業構造、換金などの諸要因から分析し、近年のミルク販売の増加とより商品価値の高いウシの飼養頭数増加など、商品経済化の進展こそが紛争を生み出す大きな要因になっていると分析する。児玉は「現代都市モンゴル族の文化変容と社会経済的動態」10(4)で、社会構造が社会主義から市場主義経済へと移行する状況下で内モンゴル社会の中に入り込み、住生活、食生活、経済生活やその変化を詳細に報告し、家畜飼養頭数の増加や定住化過程を描きあげ、地域・民族を超えた人びとの協力体制がモンゴル社会においては

重要な役割を担っていることを指摘する。石井は「モンゴル遊牧民の食生活と伝統的な食べもの」15(1)で、家畜の恵みを最大限に活かしたモンゴル遊牧民の合理的な家畜利用法を報告し、乳製品などの発酵産物の摂取の効能について説明している。平田は「モンゴル国ドンドゴビ県サインツァガーン郡・デレン郡における乳加工体系」12(1)、「イラン南部における乳加工体系の多様性」14(2)、「インド西部の乳加工体系と乳製品流通」15(2)、「発酵乳系列群からクリーム分離系列群へ発達史論—シリアの半農半牧民の事例から—」18(2)といった一連の乳文化に関する報告で、乳加工技術とその発達史を論考し、アジア大陸における乳文化圏の類型分類を人文地理学的に進め、更には乳文化論から牧畜論へのパラダイム転換を試みる。縄田は「塩生/甘生植物に対する家畜の嗜好性をめぐる経験的知識」12(1)で、乾燥地帯海岸域に暮らす牧畜民の生存基盤をなすラクダ飼養を総合的に論考する一環として、ラクダの塩生植物への採食選択性について報告し、アカザ科を中心とした植物の海岸域における飼料資源としての有用性の高さを指摘している。更に縄田は「乾燥熱帯沿岸域の食生活」16(1)で、スーダン東部紅海沿岸でラクダを飼養するベジャ族の事例から、食生活における重要な食料源として畜産物と農産物とに加えて、狩猟・採集・漁撈による産物が極めて重要な食料源となっていることを指摘し、牧畜民であっても海岸域では海産物に食生活を大きく依存してきた事実を描きあげ、人類の進化史上における食料摂取のあり方について再考を促す。

以上、20年間の『沙漠研究』誌に掲載された牧畜に関する報告を垣間みた。日本沙漠学会は、分野を横断した様々な研究者が集まる場となっていることがユニークであり、学術研究における魅力となっている。従って、報告された研究内容が、考古学、土壌・土木工学、生態学、栄養学、社会学、経済学、文学、文化人類学と多岐にわたっているのである。しかし、いずれの研究者の視点も乾燥地における牧畜理解において共通している。その牧畜への深い洞察の上に、牧畜の歴史的再構築、環境保全、牧畜民の生業戦略分析や生活保証策へと、それぞれが鋭い考察を展開しているのである。これからも『沙漠研究』誌が牧畜の総合的研究を試行する学術雑誌であり続けていくことであろう。次はどのような牧畜研究が報告されるか楽しみでならない。